Ⅰ　研究の歩み

1　これまでの研究

（1）研究テーマの設定理由

今日，都市化や情報化などの経済社会の急激な変化により私たちの生活は便利になってきた。多くの情報や電子機器，食べ物などのあふれるものに囲まれ，物質的に豊かな生活を送っていると言えよう。その一方で急激な経済社会の変化の影には，自然環境の減少や少子化，人間関係の希薄化などが社会問題として挙げられている。このような時代の中で，現代の子どもたちは，人やもの，自然との「直接的なかかわり」が非常に少ない環境に置かれていると言える。

幼児期は，自分で見る，聞く，触る，嗅ぐ，味わうなどの感覚といった直接的な経験により，心を揺り動かされ，感動するような体験と出合い，そして，経験と言葉が結び付き，自分の気持ちを言葉で表現できるようになる時期である。この直接的なかかわりが不足してしまうと，子どもたちは，自分の気持ちをうまく表現する術を獲得できず，自分らしさを発揮することができない。自分らしさは，他とのかかわりの中で発揮されるものであることから，自分らしさを発揮するためには，直接的なかかわりが不可欠であると言える。

このような幼児期の特性を考慮して，子どもの自発的，主体的な活動である「遊び」の機会を十分に確保し，「環境を通して行う教育」のもと，自分らしさを発揮できるように，子どもたちが興味や関心をもって人やもの，自然とよりよいかかわり方ができるように，どのような対象と，どのようにかかわらせていくのかを考えることが重要である。子どもたちが家庭での生活だけでは味わえない様々な経験をもつことができるように，そして，子どもたちが対象とのかかわりを通して，初めて知った喜びやこれまでとは違う自分に気付き，子どもたちが自分らしさを発揮し，よりよく成長していけるように保育を構想していくことが私たちに求められていると考える。

本園は鹿児島市の中心部ということから周辺地域の都市化が進んでいるが，園内に豊かな自然環境を構成し，子どもたちが四季折々の季節を感じ，動植物との触れ合いを通して豊かな心が育まれる環境を目指している。

子どもたちの実態として，素直で明るく，自由にのびのびと意欲的に活動する子が多く，園内に広がる様々な自然への関心も高い。また，異年齢の交流も多く，年長児が園のリーダーとして活躍する姿が多く見られる。

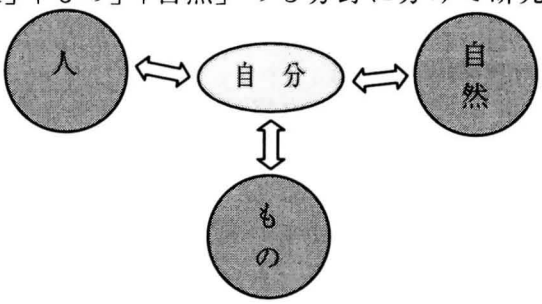
本園の子どもたちの家庭状況を見てみると，子どもたちは広範囲の地域から通園しており，その多くが核家族である。これまでに実施したアンケート調査から，自分たちの住んでいる地域とのかかわりが薄く，地域の活動に参加したことがある子どもが少ないことや近所で一緒に遊ぶ同世代の友だちが少ないことなどが分かった。子どもたちは都市部に住んでいることもあり，豊かな自然環境に乏しく，諸感覚を通した直接的な自然との触れ合いが少ない状況にあると言える。

これらの実態を踏まえ，家庭や地域と連携しながら，子どもたちが，人やもの，自然と積極的にかかわりながら遊びを展開し，様々な経験をもつことができる保育を構想していくことが大切である。人やもの，自然との直接的なかかわりによって子どもたちは，自分を表現すること，つまり自分らしさを発揮することができるようになると考える。

よって，「他とよりよくかかわることを通して自分らしさを発揮できる子どもの育成」のテーマを掲げ，研究を進めることにした。

（２）　研究テーマについて

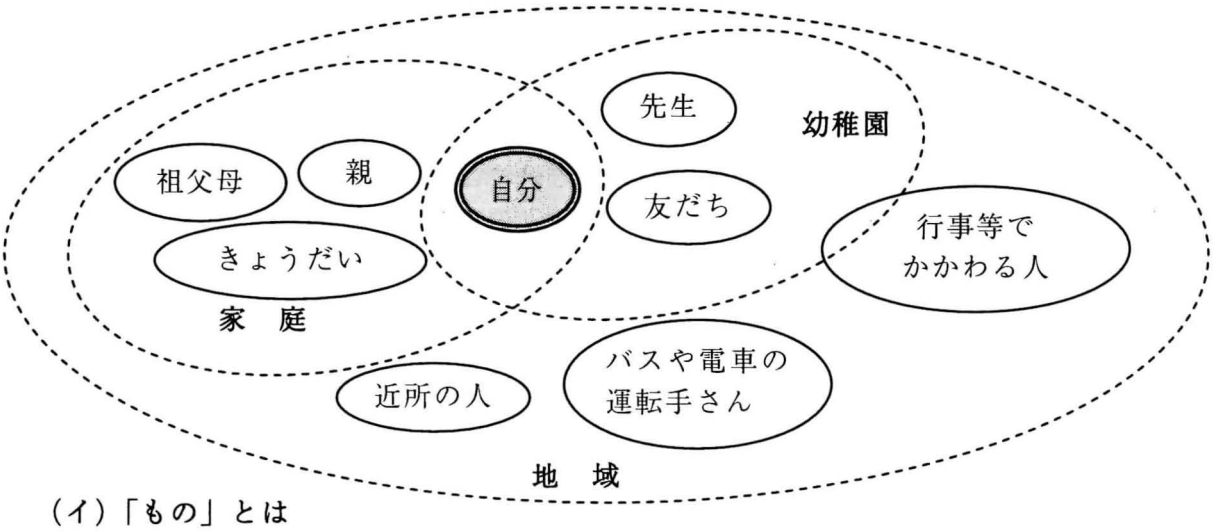
子どもたちは，常に自分以外の様々な「他」とかかわり合って生活している。本園では様々な「他」を「人」「もの」「自然」の３分野に分けて研究を進めてきた。



（ア）「人」とは

子どもたちは，初めての集団生活である幼稚園で友だちや保育者に出会う。入園したばかりの頃は期待感と不安感でいっぱいだった子どもたちも，保育者との信頼関係を土台にしながら自分の好きな遊びに没頭するようになる。そして，気の合う友だちや好きな遊びが一緒の友だちとのかかわりを楽しむようになり，同じクラスや異年齢の友だちへとかかわりを広げ，一緒に活動し，協力する面白さを感じるようになる。

「人」とのかかわりは，子どもたちの成長にとって欠かせないものであることを踏まえ，本研究では特に幼稚園の中での友だちや保育者などの「人」とのかかわりを中心に研究を進めていった。（平成１９年度　１年次研究）



（イ）「もの」とは

保育者が教育的価値を含ませながら，子どもたち自らが興味・関心をもって活動に取り組むことができるように，意図的・計画的に構成された遊具や用具，人工的な素材と捉え，研究を進めていった。（平成２０年度　２年次研究）

（ウ）「自然」とは

本園では，春には園庭のシロツメクサが白い花を咲かせ，園庭全体が白い絨毯のようになり，子どもたちはそのシロツメクサを摘んで花束をつくり，友だちや保育者にプレゼントしたり，ごっこ遊びに使ったりする姿が見られる。夏になると，草が生い茂り，バッタやトンボなどの虫たちに出合うことができる。その虫たちを追いかけて捕まえては，その体のつくりの不思議さをじっくりと眺める子どもたち。秋の紅葉や落葉，冬の霜柱や水たまりの氷など，四季折々の自然事象の中で，子どもたちは自然と季節に合わせた生活を送っている。

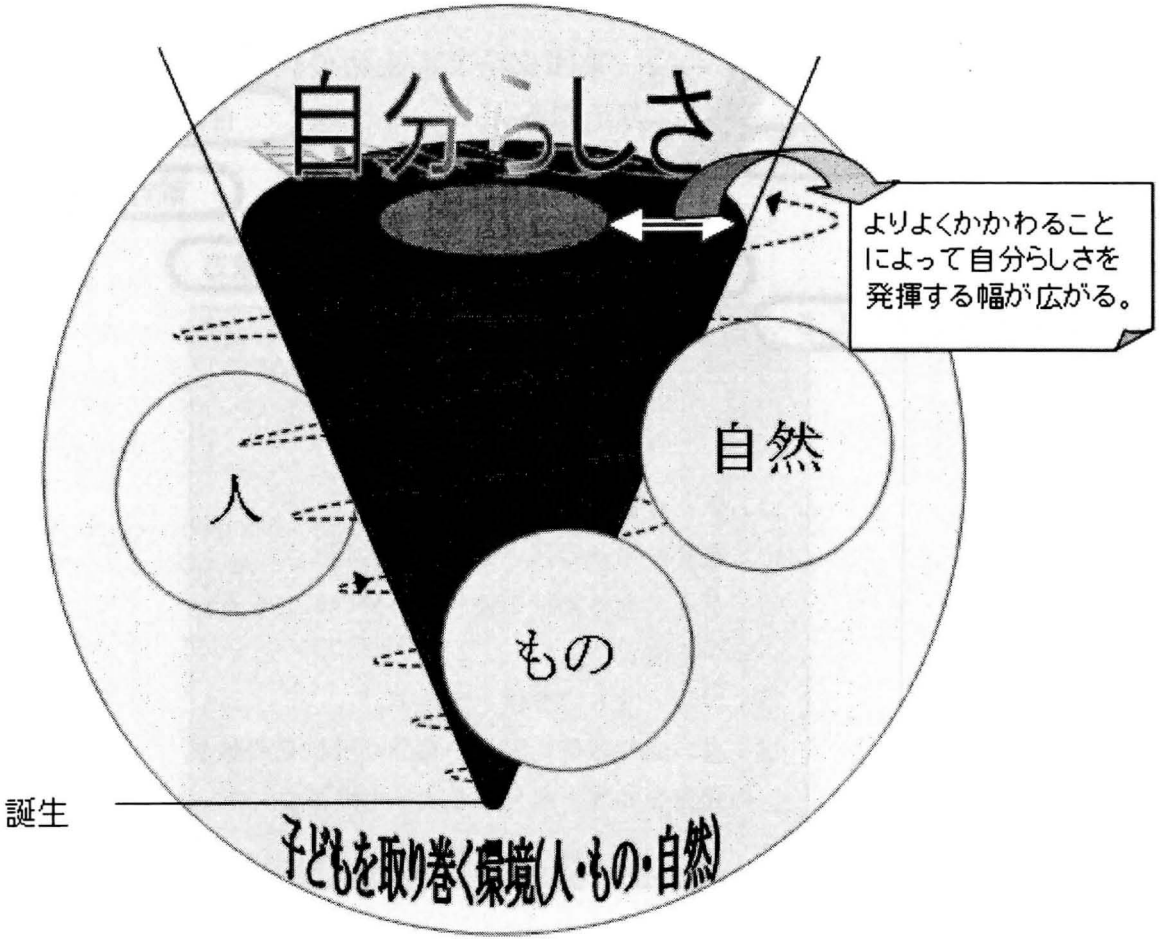
身の回りの様々な動植物や自然物，自然事象を「自然」と捉え，「自然」とのかかわりについて研究を進めていく。（本年度　３年次研究）

私たちは日々，「他」（人・もの・自然）とかかわりながら生活している。「他とかかわる」ということは生活していく上でごく自然に起こる当たり前の姿である。友だちとけんかをして仲直りをしたり，保育者と積み木遊びをしたり，園庭で花を摘んで首飾りをつくったりすることなどが「他」とかかわるということである。では，「よりよくかかわる」とはどのようなかかわりなのか，全体構造図に合わせて説明したい。

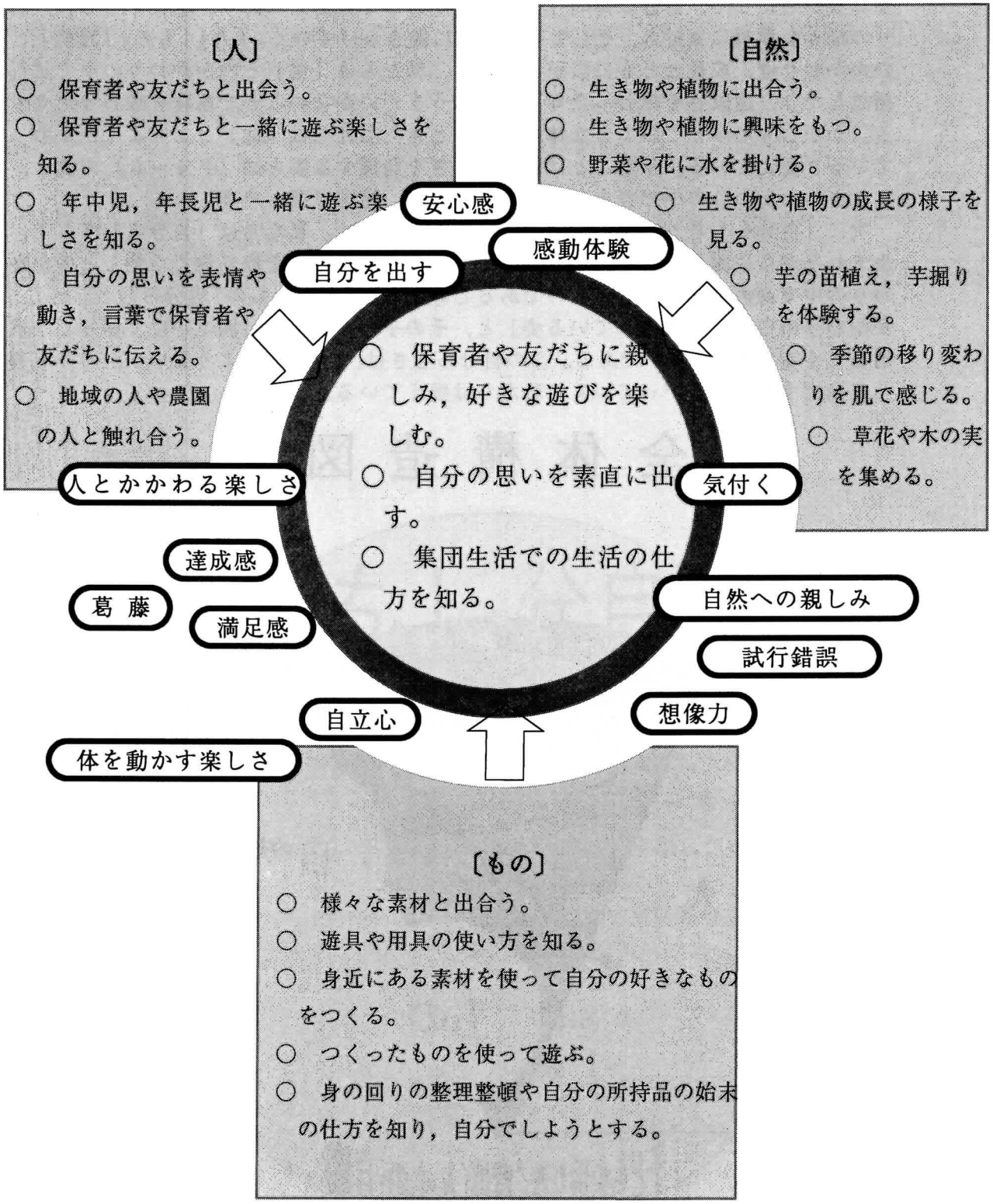
全体構造図は，「人」「もの」「自然」とかかわる自分の姿を表している。私たちは生まれながらにして，自分以外の「他」とかかわって生活しており，成長とともに，周りの様々な環境に気付き，そしてその環境に働きかけていく。「人」「もの」「自然」とのかかわりは，成長とともに広がっていき，私たちは「他」とのかかわりの中で試行錯誤したり，達成感を味わったり，時にはうまくいかないことで葛藤を味わったりする。かかわりの中でこのような体験をするとき，私たちは「他」とよりよくかかわっていると捉えている。年齢ごとに自分らしさを発揮する姿を図（Ｐ４～６）で表し，よりよいかかわりの中で育まれる体験について，楕円で囲んで表した。

次に「自分らしさ」の捉え方について説明していく。私たちは「自分らしさ」を，生まれながらに誰もがもっているものであり，子どもたちを取り巻く「他」とのかかわりの中で初めて発揮できるものであると考える。子どもたちの「自分らしさ」とは，かかわりの中で「今表出している姿」と，その子の内にあり時間をかけてゆっくり表出してくる「新しい姿」である。この自分らしさは，「他」とのよりよいかかわりを通して発揮する幅が広がっていくと私たちは捉えている。

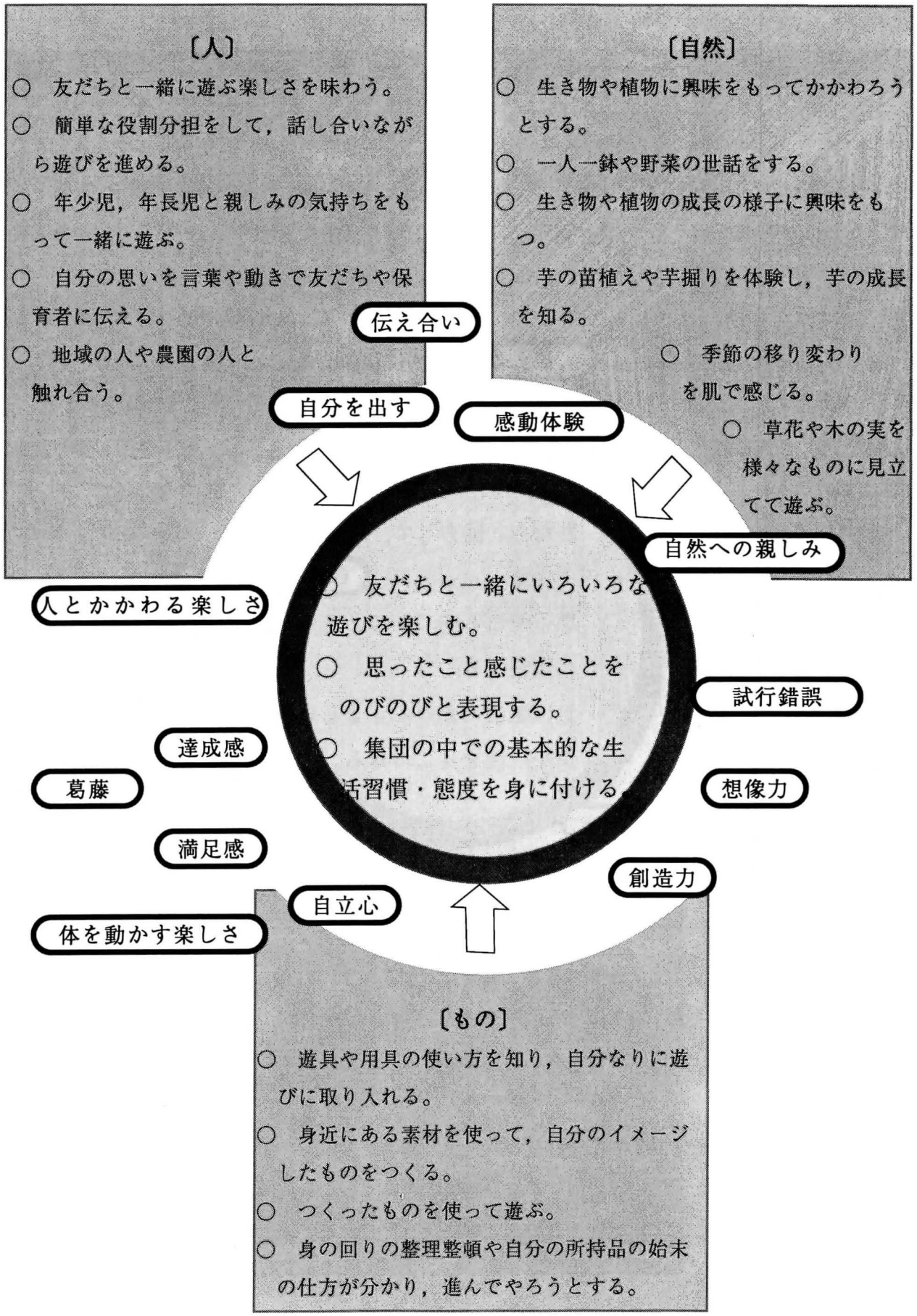
全体構造図



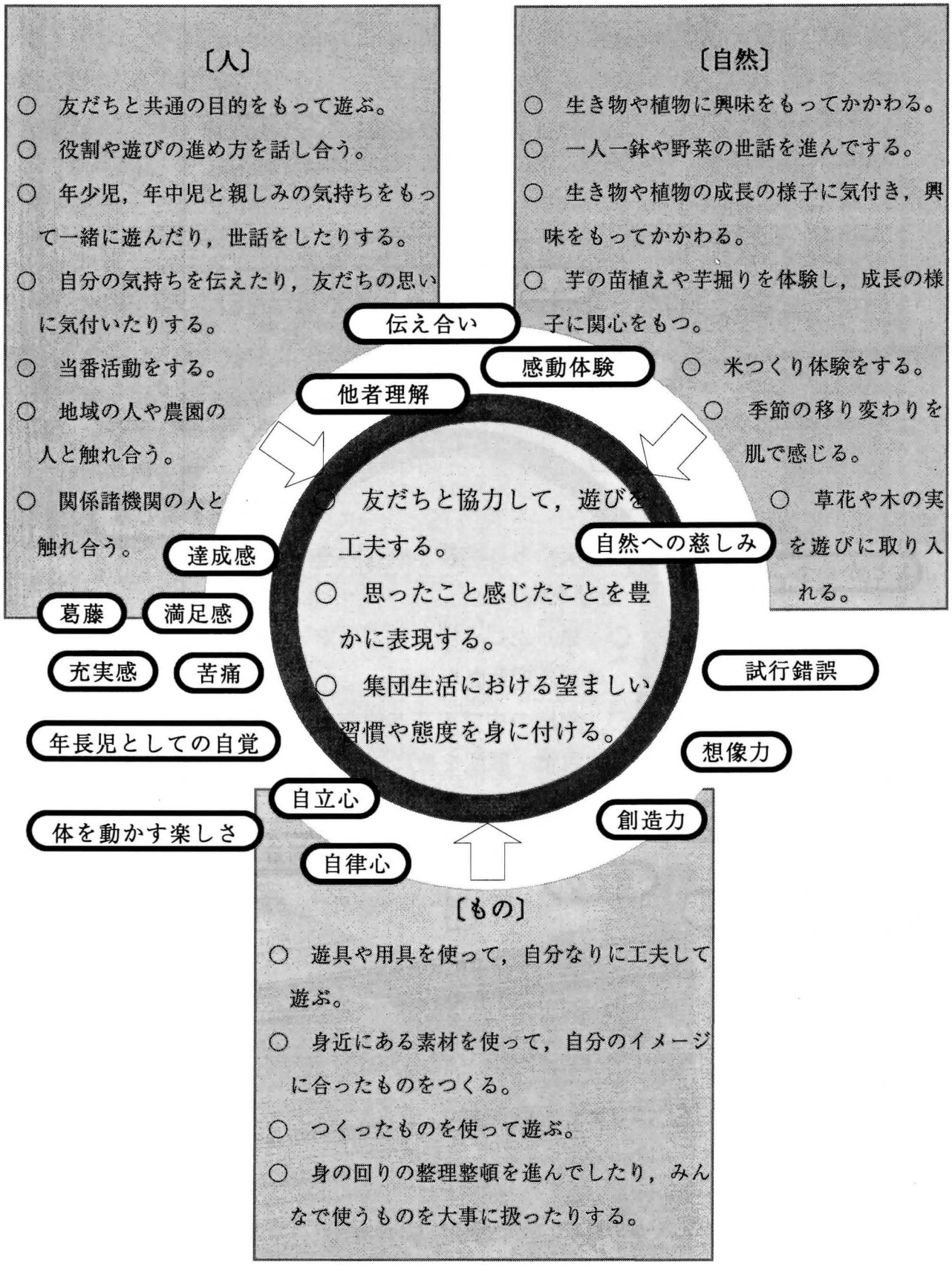
【年少児の姿】


〔人〕
○ 保育者や友だちと出会う。
○ 保育者や友だちと一緒に遊ぶ楽しさを知る。
○ 年中児，年長児と一緒に遊ぶ楽しさを知る。
○ 自分の思いを表情や動き，言葉で保育者や友だちに伝える。
○ 地域の人や農園の人と触れ合う。
〔自然〕
○ 生き物や植物に出合う。
○ 生き物や植物に興味をもつ。
○ 野菜や花に水を掛ける。
○ 生き物や植物の成長の様子を見る。
○ 芋の苗植え，芋掘りを体験する。
○ 季節の移り変わりを肌で感じる。
○ 草花や木の実を集める。
安心感
感動体験
自分を出す
○ 保育者や友だちに親しみ，好きな遊びを楽しむ。
○ 自分の思いを素直に出す。
○ 集団生活での生活の仕方を知る。
人とかかわる楽しさ
気付く
達成感
葛藤
満足感
自然への親しみ
試行錯誤
自立心
想像力
体を動かす楽しさ
〔もの〕
○ 様々な素材と出合う。
○ 遊具や用具の使い方を知る。
○ 身近にある素材を使って自分の好きなものをつくる。
○ つくったものを使って遊ぶ。
○ 身の回りの整理整頓や自分の所持品の始末の仕方を知り，自分でしようとする。

【年中児の姿】


〔人〕
○ 友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう。
○ 簡単な役割分担をして，話し合いながら遊びを進める。
○ 年少児，年長児と親しみの気持ちをもって一緒に遊ぶ。
○ 自分の思いを言葉や動きで友だちや保育者に伝える。
○ 地域の人や農園の人と触れ合う。
〔自然〕
○ 生き物や植物に興味をもってかかわろうとする。
○ 一人一鉢や野菜の世話をする。
○ 生き物や植物の成長の様子に興味をもつ。
○ 芋の苗植えや芋掘りを体験し，芋の成長を知る。
○ 季節の移り変わりを肌で感じる。
○ 草花や木の実を様々なものに見立てて遊ぶ。
伝え合い
自分を出す
感動体験
自然への親しみ
人とかかわる楽しさ
○ 友だちと一緒にいろいろな遊びを楽しむ。
○ 思ったこと感じたことをのびのびと表現する。
○ 集団の中での基本的な生活習慣・態度を身に付ける。
試行錯誤
達成感
葛藤
想像力
満足感
創造力
自立心
体を動かす楽しさ
〔もの〕
○ 遊具や用具の使い方を知り，自分なりに遊びに取り入れる。
○ 身近にある素材を使って，自分のイメージしたものをつくる。
○ つくったものを使って遊ぶ。
○ 身の回りの整理整頓や自分の所持品の始末の仕方が分かり，進んでやろうとする。

【年長児の姿】


〔人〕
○ 友だちと共通の目的をもって遊ぶ。
○ 役割や遊びの進め方を話し合う。
○ 年少児，年中児と親しみの気持ちをもって一緒に遊んだり，世話をしたりする。
○ 自分の気持ちを伝えたり，友だちの思いに気付いたりする。
○ 当番活動をする。
○ 地域の人や農園の人と触れ合う。
○ 関係諸機関の人と触れ合う。
〔自然〕
○ 生き物や植物に興味をもってかかわる。
○ 一人一鉢や野菜の世話を進んでする。
○ 生き物や植物の成長の様子に気付き，興味をもってかかわる。
○ 芋の苗植えや芋掘りを体験し，成長の様子に関心をもつ。
○ 米つくり体験をする。
○ 季節の移り変わりを肌で感じる。
○ 草花や木の実を遊びに取り入れる。
伝え合い
感動体験
他者理解
○ 友だちと協力して，遊びを工夫する。
○ 思ったこと感じたことを豊かに表現する。
○ 集団生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。
達成感
自然への慈しみ
葛藤
満足感
充実感
苦痛
試行錯誤
年長児としての自覚
想像力
自立心
体を動かす楽しさ
創造力
自律心
〔もの〕
○ 遊具や用具を使って，自分なりに工夫して遊ぶ。
○ 身近にある素材を使って，自分のイメージに合ったものをつくる。
○ つくったものを使って遊ぶ。
○ 身の回りの整理整頓を進んでしたり，みんなで使うものを大事に扱ったりする。

2　これまでの研究の成果と課題

１年次の「人」とのかかわり，２年次の「もの」とのかかわりに着目した研究を通して，「保育者としての援助の在り方」，「環境構成の工夫・改善」の面から成果と課題をまとめた。

（1）「人」とのかかわりから（１年次）

（ア）保育者としての援助の在り方

《　成果　》

○　自分らしさを発揮する子どもの姿を年齢ごとに分析したことで，子どもの発達の過程に合わせて保育者としてどのように援助の工夫をしていけばよいのかを見直すことができた。

○　子どもたちがかかわっている「人」を意識して保育に当たるうちに，保育の中での子どもたちへの言葉掛けを意識する大切さを実感することができた。

○　子どもたちが自分らしさを発揮できるようになるために，保育者として「見守る」「待つ」「直接かかわる」などの見極めの大切さを再認識することができ，年齢ごとに援助のポイントをまとめることができた。（１年次研究誌Ｐ５０，５２，５４）

○　自分らしさを発揮できるようになるには，新しいものや人と出会う喜びはもちろんのこと，試行錯誤や葛藤などの心地よい負荷を保育者として与えることも必要であることが分かった。

《　課題　》

○　今後も継続的に「人」「もの」「自然」とのかかわりをさらに分析し，様々な場面における具体的な保育者の援助の在り方や環境構成の工夫についてまとめていきたい。

○　子どもたちが自分らしさを発揮する姿が，小学校生活へもつながっていけるように，子どもの発達や学びの連続性を意識した教育課程・指導計画づくりに努めたい。

（イ）環境構成の工夫・改善から

《　成果　》

○　各年齢の目指す姿に合わせて，「人とのかかわり」の視点から子どもの発達に合わせた環境構成について見直すことができた。

《　課題　》

○　引き続き記録の蓄積に努め，記録をもとに環境構成を工夫・改善し，教育課程・指導計画作成に生かしていきたい。

(2)「もの」とのかかわりから（2年次）

《 成果 》

○ 実態調査を2回実施することによって，幼稚園での生活が家庭での生活へと影響し，「もの」とのかかわりも充実してくることが明らかになり，環境構成をする際も家庭とのつながりを意識して行うように努めることができた。(園生活でしか味わえない「もの」とのかかわりはもちろん，家庭でも扱える身近な素材とのかかわりを計画するなど)

○ 「もの」とのかかわりを追究するうちに，現在見られる遊びの中で，子どもたちが体験していることを明らかにすることができ，今後どのような姿へとつながっていくのかを意識する大切さを改めて実感できた。

○ 「もの」を分析していくことで，その「もの」の新たなよさに気付き，保育に生かすことができた。

○ 子どもが「もの」とかかわる姿を3段階で表し，事例を分析していく中で，各段階で大切にしたいことを次のようにまとめることができた。

① 新しい「もの」と出合い，初めてかかわる姿

＜保育者の援助の在り方＞

○ 子どもたちと共に遊びを楽しむ。
○ 一人一人の発見に共感する。
○ 一人一人の気付きが周りへも広がるような言葉掛けをする。
○ これまでの経験を大切にする。

＜環境構成の工夫・改善＞

○ 時期，子どもの実態に合った「もの」を精選する。
○ 子どもたちが興味や関心，「やってみたい」と意欲をもっている「もの」との出合いを計画する。
○ 充実感や満足感，達成感を感じられるような「もの」を提案する。

② 「もの」を遊びに取り入れながら，その特性に気付いていく姿

＜保育者の援助の在り方＞

○ 一人一人の気持ちに共感する。
○ 見守る，仲間に入るなどのタイミングを見極め，必要に応じて援助する。
○ 子どもたちと共に遊びを楽しむ。

＜環境構成の工夫・改善＞

○ 子どもたちがイメージするものに近付いていけるような「もの」を設置する。
○ 繰り返したり，何度も挑戦したりできるような「もの」を設置する。
○ 心地よい負荷を感じられるような「もの」を提案する。

③ これまでの経験をもとに，「もの」の特性を生かして工夫して遊ぶ姿

＜保育者の援助の在り方＞

○ 見守ったり，仲間になったりして遊びを楽しむ。
○ 一人一人の気持ちに共感する。
○ イメージや遊びが広がるような援助をする。(言葉掛けを工夫するなど)

＜環境構成の工夫・改善＞

○ 子どもたちが様々な遊びを展開できるように，これまでかかわってきた「もの」を設置する。
○ 子どもたちと一緒に考えながら，必要な「もの」を設置する。

○　各年齢の姿を整理する中で，年少児，年中児，年長児の姿が変容していく過程が見えてきて，それぞれの年齢の特徴をまとめることができた。（２年次研究誌 P63，65，67）

○　子どもたちが自分らしさを発揮するための「保育者としての援助の在り方」，「環境構成の工夫・改善」についてのポイントを年齢ごとにまとめることができた。（２年次研究誌　P64，66，68）

《　課題　》

○　「もの」の教材研究を大切にし，子どもたちと出合わせ，かかわらせたい「もの」を今後も探っていきたい。

○　来年度は「自然」を中心に研究を進めながら，今後も「人」「もの」とのかかわりを継続的に分析し，様々な場面における具体的な保育者の援助の在り方や環境構成の工夫について追究していきたい。

○　２年次研究誌参考資料（P76）で見られた「地域活動への参加が少ない」という実態に，今後どのように働きかけていくかについて模索していきたい。

○　子どもたちが自分らしさを発揮する姿が，小学校生活へもつながっていけるように，子どもの発達や学びの連続性を意識した教育課程･指導計画づくりに努めたい。

２年間の研究を通して，子どもたちが「他」とかかわる姿を追究する中で，改めて「人」「もの」とのかかわりの大切さを実感し，かかわりを通して子どもたちが自分らしさを発揮している姿をまとめることができた。

３年次となる本年度は，１，２年次の研究の成果と課題を踏まえ，「他」とのかかわりを通して自分らしさを発揮できる子どもたちの姿を意識しながら，教育課程・指導計画づくりにも取り組んでいく。

Ⅱ　研究の方向

幼児期に必要な直接的なかかわりが少ないと言われている現代，幼稚園教育の充実を図るためにも私たちは子どもたちの主体的な活動としての遊びを十分に確保し，多くのかかわりを通して，直接的な体験の機会を十分に確保できる保育を実践していかなければならない。

昨年度までの「人」，「もの」とのかかわりの研究の成果と課題を踏まえながら，本年度は「自然」に着目し，「自然」とのかかわりの中で，保育者としてどのような援助をしていくのか，環境構成をどのように工夫・改善していくのかを探っていくこととする。

1　研究計画

年　次	研　　究　　内　　容
＜１年次＞ 「人」とのかかわりを中心に	○　研究テーマについての分析 ○　年齢別の自分らしさを発揮する過程や姿をまとめる。 ○　**人とのかかわり**から自分らしさを発揮する子どもの姿を探る。 ・　保育者としての援助の在り方 ・　環境構成の工夫・改善
＜２年次＞ 「もの」とのかかわりを中心に	○　**「もの」とのかかわり**から自分らしさを発揮する子どもの姿を探る。 ○　遊びの広がりを促す「もの」の教材研究を深める。 ・　保育者としての援助の在り方 ・　環境構成の工夫・改善
＜３年次＞ 「自然」とのかかわりを中心に	○　**「自然」とのかかわり**を通して自分らしさを発揮する子どもの姿を探る。 ・　保育者としての援助の在り方 ・　環境構成の工夫・改善 ○　研究の成果，課題を踏まえた教育課程・指導計画の作成

2　研究の方法

私たちは,本研究テーマのもと研究を深めるために,次のような方法で研究を進める。

○　保育者としての援助の在り方
○　環境構成の工夫・改善

（１）実態調査の実施

現在の「自然」とのかかわりの実態，保護者の「自然」の大切さについての認識を調査する。

（２）研究保育・保育研究の実施

「他」とかかわる子どもの姿，保育者の援助の在り方，環境構成の工夫・改善について検討する。

※　初夏（梅雨時期）と晩秋（１２月初旬）に３クラス連続で実施し，「自然」とのかかわり方の発達の連続性を探る。

（３）事例研究

「自然」とかかわる子どもの姿をまとめ，そこに保育者としてどのような援助を大切にしたか，どのような環境を工夫したかを検討し，期ごとに事例から見えてきた「保育者の援助の在り方」「環境構成の工夫・改善」についてまとめる。併せて，期ごとに，園内のどこで，どのようなかかわりをしていたのかを，写真を使ってまとめる。

（４）抽出児の継続的記録

「自然」に限らず,「他」とのかかわりの中でどのように変容したかを追跡調査する。（１～３年間の継続的記録）

（５）教育課程研究

研究の成果，課題を踏まえた教育課程・指導計画を作成する。